

七夕の短冊



私は未だここに居る。だから書く。

数年振りに3メートル程の笹木の大鉢植えを買って来てホールに置き、客が七夕の願い事を記入して掛けられるよう短冊も用意した。7月7日当日の客数も少なく、余りに短冊がまばらで寂しいので、7月いっぱい、飾りにもなるのでそのまま放置しておくことにした。

15日の今日になっても大して短冊の数は増えず、以前、客の願い事で色取り取りに膨れ上がっていた頃と比べ、現在の店の状況がある意味でそのまま反映している。

笹木が短冊で満載だった8年前、妙に神経質な細君と物静かなご亭主の若いスイス人のカップル客の来店があった。店は多忙を極め、例外的な客の要望を受け容れる状況になく、色々特注を付けようとする細君は実に煩わしく、私の接客は必然的に皮相で横柄なものとなった。

-できないことは、できません。

余りに食い下がるので其の後は機械的な配膳に徹して流しているうち、細君は不満を貼り付けた泥眼の能面と化し、私を睨むようだったが、ご亭主の方は供された料理ごとに大変満足気で、終始にこやかに見えた。デザートをサービスした時、細君がご亭主に短冊とペンを渡し、テーブル越しに手を握っている様子を垣間見た。その後この二人は私が知らぬ間に会計をして帰ってしまっていた。

数か月程してこの細君からクレームの手紙が届いた。最悪のサービスであったこと。

ご主人が和食好きで当店での会食を最後の食事^{さいご}として希望し、大変楽しみにしていたこと。懐石レストランの高級客と自分たちの予約した安い方のアラカルトレストランでは客への対応が違うのかという問い。そして、文字通り当日の夕食が最後の夕食となり、ご主人が先日、癌で他界したこと。

スイスでは日本でのように短冊の付いた笹木を川や湖に流すわけには行かず、客の書いた短冊は全て一枚一枚取り外して燃やし、笹木は当館の庭にその都度植え込むことにしている。その年。

- Krebs besiegen !

と書かれた短冊があつて、女将と本当に治るといいね、どの客だろうね、と会話した記憶がある。

来店する客それぞれに理由や動機がある。特に町中になくない兎山は、皆、当館を意図して目指して、場合によって、相当大切に思つて訪ねて来られる。スイスで現在和食店としては、唯一のミシュランの有星レストランということもあるだろう。当館での食事の意味、重要さは一様ではなく、客にとって掛け替えのない時間かもしれない。

最早取り返しのつかない、あの日のサービス・接客を私は心から悔いている。如何なる当方側の事情があれ、精一杯の「持て為し」を心に決めておいて余り有ることはない。